

## 平成29年度 国際教育推進委員会活動報告

著者	建元 喜寿, 田村 憲司, 岡 聖美, 松井 一夫, 今野 良祐, 吉田 賢一, 吉岡 昌悟, 福田 美紀, 仲本 佳子, 高畑 啓一, 山本 直佳, 藤野 昌哉, 齊藤 真吾
雑誌名	研究紀要
巻	55
ページ	65-68
発行年	2018-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00152942">http://hdl.handle.net/2241/00152942</a>

# 平成29年度 国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員会

建元喜寿・田村憲司・岡 聖美・松井一夫・  
今野良祐・吉田賢一・吉岡昌悟・福田美紀・  
仲本佳子・高畑啓一・山本直佳・藤野昌哉・  
斎藤真吾

本校では、10年前に国際教育推進委員会を発足してから、各方面で声高に叫ばれている「グローバル人材の育成」を目指し、筑波大学附属坂戸高等学校では総合学科の特長を生かしながらさまざまな国際教育・ESDの取り組みを行ってきた。平成26年度には、スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、平成29年2月には国際バカロレア日本語DP認定校となり、平成30年度からその1期生が入学する。今後、本校の国際教育活動がどのように動いていくか、すべてが見通せるまではしばらく時間を要すると思われる。本稿では、本年度はじめてジャカルタで実施した、第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティングおよび、10回目を迎えた海外卒業研究支援制度について報告した。

キーワード SGH 日本語DP 国際教育 ESD（持続発展教育） SDGs

## 1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして20年以上歩みを重ね、平成26年度のSGH指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。そしていよいよ、2018年4月から、国際バカロレア日本語DPの1期生が入学する。

「総合学科」＋「SGH」＋「IB」の学校運営の中で、

国連持続開発目標SDGsを実現できる人材育成を目指し、筑坂（つくさか）の未来を考えた2017年度であった。本稿では、本年度はじめてジャカルタで実施した、第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティングおよび、10回目を迎えた海外卒業研究支援制度について報告する。



第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング

@ジャカルタ

—インドネシア5校、SGH校3校が参加—

(2017年8月10日)

於：インドネシア政府環境林業省ホール)

## 2. 第1回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング @ジャカルタ

SDGs とは、Sustainable Development Goals の略である。2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」で、193 の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ (2030 アジェンダ)」が、全会一致で採択された。この、2030 アジェンダでは、「誰一人取り残さない (No one will be left behind)」を理念として、国際社会が 2030 年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17 の目標 (ゴール) が持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs) として設定された。

これまで日本国内では、本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012 年から「高校生国際 ESD シンポジウム」を実施してきた。SGH 指定から組織した S-CIS (生徒国際教育委員会 : Student Committee of International Studies) のメンバー (本校の 1~3 年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している) が中心となり、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行ってきた。この活動を海外にもひろげ、本校と海外の学校との実質的な交流を深め、さらには SGH の成果を国内だけではなく海外へも発信していくために、本年度、あらたな取り組みとして、平成 29 年 8 月 10 日、中央ジャカルタにあるインドネシア政府環境林業省のホールにおいて、「第1回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を開催した。ESD は、広い概念的な言葉のため、各学校の ESD 活動をより具体的に位置づけ、それぞれの関連性を可視化するツールとして有効であると考え、SDGs を用いることとした。

当日は、日本から本校、大阪府立泉北高等学校、中部大学春日丘高等学校の SGH3 校、インドネシアからは、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、プナブール高等学校、ブカシ国立第1高等学校、ダルマガ国立第1高等学校の 5 校、計 8 校が参加して実施した。各学校の課題研究の発表を SDGs と関連付け、発表を行った。当日は、ポスターセッションも行い、これまで「国際」で実施してきた ESD シンポジウムのノウハウを生かした国際シンポジウムを海外で実施することができた。



日本でのノウハウを生かしたポスターセッション

## 3. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う (または行おうとしている) 生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 28 年度までの 9 年間で計 55 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 18 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

29 年度においては 2 年次生を対象に募集した結果、5 名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	フィリピン	フィリピンにおける女性の社会進出に関する研究
B	ベトナム	ベトナムの特別支援教育について
C	タイ	タイの日本語教育について
D	中国	中国の水質問題について
E	フィリピン	フィリピンの英語教育について

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒 A1 名を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施してきたが、毎年、予算が厳しくなってくる中で、遠方への派遣が厳しいこと、また 2 年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っていることから、渡航先をアセアン+2 (中国・韓国) に限ることとした。

フィリピン渡航に関しては、昨年度国際連携協定を締結したフィリピン大学附属ルーラル高等学校、本校の英語科教員 (フィリピン出身) が連携して準備を行った。内容も、非常にすぐれたもので、SGH 開発科目「グローバルライフ」・「T-GAP」などの効果が出ていると考えられた。

#### 4. 生徒の変容について

SGH 指定4年目に入り、全校を対象にした国際教育活動も浸透してきた。生徒の変容に関しては、詳細は本校のSGH 報告書に譲るが、文部科学省がSGHの成果指標にしている「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合」は、指定前はわずかに3%であったが、英検2級取得者が大幅に増加し、さらに英検準1級合格者もでた。

卒業生の追跡調査でも、大学入学後に海外に留学したり、国際交流基金の「日本語パートナーズ事業」により日本語教師として、アセアンの国で日本語教師として活躍する卒業生もでている。今後、このような卒業生の追跡調査も含めて、生徒の変容をとらえていきたい。

#### 5. おわりに

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして20年以上歩みを重ね、平成26年度のSGH指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。そしていよいよ、2018年4月から、国際バカロレア日本語DPの1期生が入学する。



第6回高校生国際ESDシンポジウム@東京は本年度も大盛況



ポスターにはSDGsのマークを記載にてわかりやすく工夫した



カセサート大学附属高等学校とも国際連携協定締結



様々な企業、団体との連携もすすみました

ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。

「総合学科」+「SGH」+「IB」の学校運営の中で、国連持続開発目標SDGsを実現できる人材育成を目指し、筑坂（つくさか）の未来を考えた2017年度であった。

※なお、SGHの平成29年度の内容は、第4年次報告として別途まとめている。SGHの詳細については、そちらを参照ねがう。

【資料】平成29年度 国際教育・ESD 活動一覧

月	内 容
4月	インドネシア・バンドン第一職業高校 生徒4名、教員2名が来校
5月	AIMS プログラム筑波大学留学生41名来校・2年次生と交流
6月	台湾・復興実験高級中学 生徒83名、教員3名が来校
6月	長野県上田高校主催「北陸新幹線サミット」生徒10名参加・発表
7月	韓国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員1名参加
7月	3年生1名が姉妹校インドネシア環境林業省附属高校に1年留学へ
7月	3年生1名が姉妹校フィリピン大学附属ルーラル高校に1年留学へ
8月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒7名教員2名参加
8月	第1回日本インドネシア高校生SDGs ミーティング@ジャカルタ開催
8月	第1回全国高校教育模擬国連大会 生徒16名 教員2名参加
8月	京畿外国語高校主催模擬国連大会 生徒3名 教員1名参加
8月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施 生徒23名、教員3名、筑波大学留学生2名参加
8月	国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（フィリピン）生徒2名 教員1名参加
8月	教員4名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでカナダ・トロントに渡航
9月	インドネシア・台湾・カナダから3名の留学生が来校（1年間）
10月	姉妹校コルニタ高校から5名の留学生が来校（3週間）
10月	タイ・カセサート大学附属高校カンペンセン校舎 教員視察受け入れ・研究協議
10月	福井県立高志高校（SGH校）生徒25名、教員3名来校、卒業研究発表会で交流
11月	インドネシア・フィリピン・タイより生徒8名・教員4名ホームステイ受け入れ
11月	高校生国際ESDシンポジウム@東京2017（第6回）開催
11月	第3回SGH生徒成果発表会開催 海外校・SGH校20校によるポスターセッション
11月	タイ・カセサート大学附属高等学校と協定校提携調印
11月	AIMS プログラム筑波大学留学生42名来校・1年次生と交流
11月	SGH全国高校生フォーラム 生徒1名発表、教員2名参加
12月	フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒5名、教員1名が来校
12月	SGH国際FW「インドネシア・ボゴールリーダー会議」教員2名、生徒2名渡航
1月	イオン1%クラブ日本プログラム インドネシア生徒16名来校
2月	「国際的な視野に立った卒業研究支援P」 生徒1名・教員2名がフィリピン渡航
2月	第4回SGH研究大会・第21回総合学科研究大会開催
2月	東京学芸大学主催 SSH/SGH課題研究成果発表会 生徒8名参加・発表
2月	栃木県立佐野高校「海外グローバル研修課題研究発表コンテスト」生徒1名招待発表
3月	1年次海外校外学習（カナダ・トロント）実施
3月	イオン1%クラブ日本プログラム 生徒16名インドネシア渡航